

軍事・歴史・政治・経済研究紙

MONTHLY DAITOH-NEWS

本紙の年間購読は本体3,000円+税です。

中国と中国人の実体を知らない日本人

中華人民共和国の現代史

日本が終戦直後の食糧難に苦しんでいた頃、この期間、中国の出来事としては、中国大陸では内戦が始まり、やがて国民政府軍は台湾に逃げ、毛沢東の中国共産党軍が中国共産党に中華人民共和国を建国する口実を与えた。共産党革命によって中国人は血で血を洗った。革命によって三千万人も中国人の命が失われた。この歴史的事実より、日本では「リン」の歌や「港の見える丘」の歌謡曲の方が、日本人の心を曳き、日本人の多くは今日一日どうやって喰って行くか、そのことだけが関心の的であった。隣国近くで起っている事より、自分の事で精一杯であったのである。

東京はアメリカ軍機の百回を越す空襲を受け、十万人以上の死者と百万人以上の罹災者を出し、大方の日本列島は焦土と化していた。街は不景気の真只中であり、家族と生き別れた子供達や、職を失った浮浪者で溢れかえっていた。

これまで都会に棲んでいた人の多くは、焼け残った僅かな衣類を田舎に持って行き、農民に芋と交換する人々の列が続いていた。誰もが、空きつ腹を抱え、空腹に耐えていたのである。

米を買い漁る闇屋も、札束を靴に詰めてトラックで水面下の活動を展開していた。

一方、人情味のある農民も居たが、農民の多くは残忍で狡猾な者が多かった。都会から長時間かけて、僅かな米や芋を買い需めに来た若い女性や新妻達は、農作物と交換する着物や衣類だけでなく、いま自分が履いているもんべまで脱がされた。強欲で、狡猾な農民の多くは、こうして若い女性や新妻達を犯し、弱肉強食の地獄絵巻を、秩序の無い世界で再現して居た。敗戦の痛手は多くの爪痕を残し、それを引き摺り、人々の正常な心までを麻痺させて居た。そして秩序を失った世の中は敗戦後十年間はこれから立ち直る事が出来なかった。また、こうした事が中国に対して認識をする機会を失わせて居た。

中国の偽らざる姿

一九八〇年代、日本には「国際化旋風」の波が押し寄せた。それに呼応するかの如くに、中国では共産党政府が中心になって対外労働合作公司や国際経済技術合作公司は、地方公安局に具体的な日本向けのお膳立を命じた。このお膳立とは、海南島と広東の国営農場に集めて居た中越戦争の時に本国に帰還した華僑を、対日国家戦略の一環としてポータービープルに偽装させて日本へ送り込む事だった。

一九八九年には約三年五百人の難民が日本に渡って来た。しかしその多くは中国からの「偽装難民」といわれた人達であった。

偽装難民が日本国内で社会問題化する、中国共産党政府はこれを受けて、「難民報道は大袈裟な日本の騒ぎ過ぎ」と強い不満を洩らすと共に、上海では公安当局は青年達を焚き付け、「ヒザよこせ」のデモ騒動を企て、日本大使館を包囲したのは周知の通りである。そして中国の対日国家戦略が始まった。

この主旨は、旧ソ連製の武器を日本に垂れ流す事であり、中国から日本、日本から台湾という流れが出来上がり、今日では小学生でも知っている旧ソ連製の将校用拳銃であったトカレフが街に回っている。

現在では、ビジネスや技術研修、留学や観光、興行や国際結婚といった目的で様々な中国人が日本に入り込んで来ている。また、様々に偽装して、就業目的で不法入国する中国人も少なくない。在留期間を過ぎた後でも日本に居残る不法残留者が跡を絶たないのである。

一方、「蛇頭」と言う密航者の手引きをするチャイニーズマフィアはよく知られているが、集団密航で日本の警察と海上保安庁に検挙された外国人千二百二十三人のうち、約八割の八百二十四人が中国からの密航者であった。

またチャイニーズ・マフィアのビジネスは密航者を日本に送り込む事だけではない。様々なルートを通じて、日本に密輸も企てている。日本へ密輸入される麻薬や覚醒剤の八割は、雲南省などで作られた中国製の薬物である。

中国のこうした側面は欧米の圧力によって指弾されるが、中国共産党政府と公安当局は、国内では取締の強化をするポーズと取りながら、麻薬犯罪者の大量処刑を演じながら、その一方で、既定方針（ジェイデンファアンジン）と称して、半ば公然と麻薬を大量に国外へ流出させるビジネスを中国国内に所在するシンジケートに任せている。中国共産党政府下では「愛国無罪」と言う思想があり、愛国の二文字にかけて、それが愛国精神から派生するものであれば、何を行っても無罪であると言おう考え方が中国人に根付いている。事実、つい最近までは、公安部執務室などには「わが党は資本主義世界に対し、アヘンをもって鴉片（アヘンの意味）戦争の仇を討たなければならぬ」という毛沢東の「最高指示」の額が掛けられて居た。

中国大陸に棲む中国人の実体は、アメリカと同じように多民族国家である。

中国人の中には、自分は中華人民共和国の公民であると言う人もいれば、自分は総称して中国人だと言う人も居る。あるいは蒙古人だ、朝鮮人だ、チベット人だ、台湾人だと言う人も居る。更には中国共産党の本部を構える北京政府に対し、自分達のアイデンティ

ティや民族の誇りを武力で制圧し、自由を奪った征服者だと言う見方もある。中国は漢民族が九割を占める国家であるが、中国大陸と言う広大な土地には、歴史と風俗習慣を異にする、蒙古、ウイグル、チベット、壮、回、カザフ、苗、満、朝鮮などの五十以上の民族と、三十以上の言語が存在している。そして同じ中国語でも、大陸では左から右に書き、台湾では右から左に文字を書くのである。異文化が渦巻く中国大陸とその周辺の台湾や香港では、中国の国家的戦略の中で様々な民族が共産党政府の盤上のコマとして使われている。様々な思惑があり、その征服者の思惑によって、まるで捨て駒のように使われ、消費されていると言うのが、中国人民の偽らざる姿である。

社会主義建設のための露払い

一九九九年、中国ではアメリカを仮想敵国とする「超限戦」という本と、中国共産党政府の国家安全論を論じた「国家安全」という本が出版された。

「超限戦」というのは、限定された戦争を超えた新たな戦術という意味のもので、これを駆使した戦争の事を指す。この戦争思想下にはアメリカを仮想敵国として考え、具体的な戦法としてコンピュータのハッカーを国家規模で養成して、アメリカの軍事情報網を混乱させると言うものである。

これを「情報戦」と称し、数学者や理学者の養成を青少年時代から特訓する政策が展開されている。

彼等は「聖書」を神の言葉であると定義している。したがってこの定義を誰が覆えす事が出来ようか。

ここではつきり認識しなければならぬ事は、自然科学は不完全帰納法によって構築されていると言う事である。

また、「聖書」は神の預言からなる言葉で綴られているという事である。したがってこれを信じるか信じないかは、神の預言を信じるか信じないかと言う事であり、「信じる」とすれば、自然科学者であっても「聖書」を信じる者は出て来るのである。

一方、今日までの仮説で固められた自然科学は、不完全帰納法を一步も出たものではなく、この点において、「信じる」とする「聖書」とはその次元が異なっている事が一目瞭然となるであろう。

そして日本人の感覚で信仰と言うものを取り上げた場合、日本人は欧米人と異なり、何処まで行っても、どのような宗教に帰依してもその根本には日本教と言うものがあり、日本教の特徴は中途半端な無神論者という一面が決して拭えないのである。これが欧米の唯神論者と大きく異なる点であり、日本人がある宗教に帰依しそれを信仰すると言う感覚と、欧米人の「神を信ずる」と言う感覚は次元的に大きく異なっているのである。

奇蹟を起こす『聖書』

(その四十五) 米国イオンド大学教授 曾川和翁

先に述べた「聖書」の「イエスが水の上を歩きたもうた」の一節を上げれば、一般人の科学認識からして、これは「重力の法則」を完全に無視しているように思える。宗教を持たない日本人ならば尚更である。

ところがファンダメンタリス（ジェイデンファアンジン）と称して、半ば公然と麻薬を大量に国外へ流出させるビジネスを中国国内に所在するシンジケートに任せている。中国共産党政府下では「愛国無罪」と言う思想があり、愛国の二文字にかけて、それが愛国精神から派生するものであれば、何を行っても無罪であると言おう考え方が中国人に根付いている。事実、つい最近までは、公安部執務室などには「わが党は資本主義世界に対し、アヘンをもって鴉片（アヘンの意味）戦争の仇を討たなければならぬ」という毛沢東の「最高指示」の額が掛けられて居た。

中国大陸に棲む中国人の実体は、アメリカと同じように多民族国家である。

中国人の中には、自分は中華人民共和国の公民であると言う人もいれば、自分は総称して中国人だと言う人も居る。あるいは蒙古人だ、朝鮮人だ、チベット人だ、台湾人だと言う人も居る。更には中国共産党の本部を構える北京政府に対し、自分達のアイデンティ

「自然法則にして、もともとと神が造りたもうたものであり、神が造った法則ならば、自然法則を自由に変更する事もできるし、あるいは一時的に停止する事も出来る。重力の法則を、一時的に停止したのであれば、イエスが水の上を歩いたとしても決して不思議ではなく、仮説信者の科学的と称する論拠の出処は、あくまで不完全帰納法の範疇を一步も出た事はなく、仮説信者への反撃を一步も弛めない。

また、こうも言う。

「自然科学の法則と豪語しても、この法則の真意をあなた自身で確かめたのか。ただ単に著名な科学者の言を、盲信的に信じ、その請け売りをしているだけに過ぎないではないか。自然科学の学説は、何処まで行っても仮説の範疇を一步も出たものではなく、また、それ以上のものでもない。

学問と言うものは、発展し、進化して行けば、これまでの常識でも、次々に覆されるではないか。これこそ今日の科学的と自称する事案が、単に仮説であると言いつつ証拠である。要するに、現在の時点では、著名な科学者の言が「信用出来そう」という範疇に止まるもので、今日の科学常識の仮説は、「一応現時点で信用しますが、しかし、それ以上に聖書の方をもっと信じます」と言う事であり、自然科学の不完全帰納法と違って、『聖書』は「神の預言の書」であるから、最も信憑性が高いと言える。そこに疑う余地はない。

これこそが神の言葉の凝縮であり、聖書は「神の預言の書」であるといえる」と、ファンダメンタリスたちは付け加える。

果たして人は、この論理に誰が批判を加える事が出来るか。

歴史を工学的に科学する

〒802-0985  
北九州市小倉南区志井6丁目11-13  
(尚道館ビル2F)

九州科学技術研究所  
093(962)7802 FAX093(961)8224  
Eメール: science@daitouryu.com



九州科学技術研究所  
Kyushu Technology Institute

九州科学技術研究所 URL  
<http://www3.ocn.ne.jp/saigouha/>

大東流霊的食養道HP  
[www.daitouryu.com/syokuyou/](http://www.daitouryu.com/syokuyou/)

癒しの杜の会HP  
[www.daitouryu.com/iyashi/](http://www.daitouryu.com/iyashi/)